

日本は核武装せよ ~人類唯一の被爆国家の権利~

加瀬英明 (外交評論家)

平成29年10月号(248号)
(皇紀2677年) 毎月1日発行

新風

編集人 瀬戸開

発行人 魚谷哲央
年間購読料 2,000円

維新の党・新風本部
〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
http://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org



強力な報復力が平和を守る最効果的な抑止力

私は、日本が人類唯一の被爆国家として、世界のどの国よりも、核武装する権利を持つてゐると、固く信じてきた。

トルーマン大統領が広島への原爆投下を決定したのは、昭和二十(一九四五)年七月のホワイトハウスの会議だった。私は会議に陸軍次官として出席したジョン・マクロイ氏に会って、原爆投下について質問したことがあった。

アメリカにはまだ空軍がなく、広島、長崎に核攻撃を加へたのは、陸軍航空隊だった。昭和五十三(一九七九)年に、『ニューヨーク・タイムズ』社の社主だったサルツバーク夫人が、私たち夫婦がアメリカに來ることを知ると、

マンハッタンの郊外の私邸で晩餐会を催してくれた。そこに夫人の古い友人のマクロイ氏が招かれてゐた。私はマクロイ元次官が誰か知つてゐた。食事の中に「もしあの時、日本が原子爆弾を一発でも持つてゐたら、原爆を一発でも持つてゐたら、日本に対して使用することはありえなかつた」と、答へた。私は「答はわかつてゐたが、あの歴史的会議に参加した人をはじめて会ふので、念を押したかつた」と、言つた。

原爆投下実施部隊の最後の戦友会で講演

私は「答はわかつてゐたが、あの歴史的会議に参加した人をはじめて会ふので、念を押したかつた」と、言つた。広島市の平和記念公園に、『安らかに眠つて下さい 過ちは繰返しませぬから』といふ有名な碑文が刻まれてゐるが、「核兵器を持たないために、再び悲惨な核攻撃を招くやうな過ちを、繰り返してはならない」といふ誓ひとして、読まねばならない。強力な報復力を持つことが、平和を守るもつとも効果的な抑止力となる。

平成二(一九九〇)年八月に広島、長崎に原子爆弾を投下した、陸軍航空隊第五〇九混成団の最後の戦友会が、ネバダ、ユタ州の州境をまたぐウエンドオーバーにおいては行はれた。大戦中は広い砂漠に囲まれた小さな村で、もつとも近い町でも二百キロあまり離れてゐた。ここに秘密基地が設けられ、原爆投下実施部隊が訓練を受けた。当時の隊員が家族を連れて、会場のホテルに集まつた。私は記念講演を行ふために招かれ、四十分講演することになった。アメリカの友人を通じて頼まれたのだつたが、昭和二十年夏の広島痛ましい原爆犠牲者の霊に背中を押されて、演壇に立つた。

最前列に当時の混成団の団長で、広島・長崎の上空を飛んだポール・ティベツ准将(退役)が背広姿で座つてゐた。私は日本が原爆投下の二ヶ月前に、スウェーデンとソ連に和平の仲介を申し入れてゐり、アメリカも知つてゐたから、原爆投下がなくても降伏したから、原爆投下は無用だつたと説いた。私は広島、長崎への原爆投下は、戦争の狂気のなかで行はれたが、国際法に反する残虐行為だつたのにもかかはらず、いまでは日本国民は原爆投下を赦してをり、アメリカを恨むことがないと結んだ。講演を始めてから十分もすると、旧隊員たちが百人、百五十人と、家族とともに席を立つて廊下へ出て、抗議するために愛国歌を次々と合唱しはじめた。私が話を終へた時には、会場は空席ばかりで、四十人あまりしか残つてゐなかつた。そのなかに、ティベツ准将もゐた。ティベツ准将は何も言はずに廊下に出て行つたが、私が感動したのは三十人あまりが家族とともに列をつくつて、私に握手を求めて「よい話だつた」とか、「日本の見方がよく分かつた」と言つた。その間も、廊下から愛国歌を合唱する声が流れてきた。旧隊員たちは原爆を投下したことによつて、日本が降伏して日本本土へ侵攻すること avoided されたために、日米両国の数百万人の人命を救つたと信じて、大きな誇りとして生きてきたのだつた。私を招いたのも、原爆投下によつて日本が救はれたと感謝すると、信じてゐたのだつた。その夜、ホテルで戦友会の晩餐会が行はれて、私も来賓として招かれてゐたが、隊員のなかに何人か、私を「殴り殺す」といきまいてゐるから、部屋から出ないでルームサービスをとつてほしいと、言はれた。翌朝、地元紙に私の講演の要旨が報じられた。隊員は全員ウエンドオーバーの大通りに建立された記念碑の除幕式典に出かけたが、私は参加することを断はつた。夕方、二人の旧隊員が私を空港まで送つてくれた。その前に、戦友会の取材に來てゐた何人かの日本の新聞特派員から、インタビューを受けた。「日本人として言ふべきことを、言つてくれた」と言つて、誉めてくれた。

新風驟雨

しんぷうしゅう

▼昨春四月、薩摩を訪れた。南洲墓地を初めて参つて、その墓数に圧倒された。薩摩石で莊重に建てられた墓に見入つてゐると、勇猛果敢な薩摩単人の姿が眼前に浮かんできた。西郷隆盛の墓を拜し終つたとき、数墓左に人影が立つた。見ると、その人は何やら供へ物や祭器を広げようとしてゐる。恐らく命日なのであらう。挨拶してその人は松永清之丞の曾孫であることがわかつた。▼松永清之丞は、西南義挙に於いて、薩軍二番大隊一番小隊長を務め、激戦を極めた田原坂で勇ましく指揮をし、自ら斬り込みをし、左腕を撃たれ敵弾は胸板に当たり、斃れた。▼西郷が蹶起に踏み込む切掛になつたのが、私学校の学生が政府の火薬庫大阪移動に激昂し、掠奪した事である。学生は首班が清之丞である。曾孫から、清之丞について文二枚、薩軍編制表、田原坂戦の綿絵を戴いた。▼子孫が今尚、西郷始め西南義挙の志士を祀り続けている事に心打たれた。清之丞だけでなく、西郷の温情に深く心服した庄内藩から留学した伴兼之、榊原政治二青年の墓が墓地入口に建つてゐる。二青年は薩軍と共に戦ひ、義に報いた。▼ピーターこと振付師・竹邑類、競馬騎手の武豊の曾祖父も南洲墓地に眠つてゐる。西郷達は九月二十四日、城山で自刃。▼佐賀、秋月、神風連、萩と続いたわが国史の最大の義挙は今年百四十年を迎へる。(渡)

撃墜王の田形准尉に被爆男女の悲痛な声

私は前大戦の陸軍の撃墜王の田形竹尾氏と、親しかつた。しばらく前に物故されたが、支那事変で初陣を飾つた戦闘機乗りで、終戦の年に台湾上空で『飛燕』を駆つて、部下の僚機と二機で、三十六機のグラマン戦闘機を迎撃して、十六機を撃墜した後に、愛機が被弾して水田に不時着した。田形准尉は転勤して任地へ向ふ途中、列車が原爆投下直後に広島市のすぐ手前で停まり、線路が復旧すると、鉄骨が鉛細工のやうに振れた広島駅に入つて、十数時間動かかなかつたため、駅の外に出た。顔から体まで皮膚が焼けただれてはがれた老幼男女が、田形准尉の将校服を見て、口々に「きつと、このかたきを討つて下さい」と、叫んだ。田形氏は「胸につけた航空徽章が、これほど恥しかつたこととはなかつた」と、語つた。

私は原爆といふたびに、田形氏にすがつた焼けただれた男女の悲痛な声が聞えてくる。

本紙目次

- 一頁：日本は核武装せよ
- 二頁：人類唯一の被爆国家の権利
- 三頁：他

●党声明

本紙目次

- 一頁：日本は核武装せよ
- 二頁：人類唯一の被爆国家の権利
- 三頁：他

●党声明

本紙目次

- 一頁：日本は核武装せよ
- 二頁：人類唯一の被爆国家の権利
- 三頁：他

●党声明